

逆転している大歩危礫質片岩

甲 藤 次 郎 (元 所 員 ・ 高 知 大 学) 平 朝 彦 (高 知 大 学)

四国の尾根は 文字通りの四国山脈であって 西には近畿以西の最高峰とうたわれている男性的な岩山の石鎚山(1,981m)があり 東には高さは前者とあまり変わらないが やや女性的な剣山(1,955m)がそびえ 何れも古くから信仰の対象となっている

吉野川は 源を愛媛・高知県境の高知県土佐郡本川村瓶ヶ森(1896.5m)に発し 四国の中央部を東流して徳島に至る延長194km・流域面積約3,700km²に及ぶ四国最大の河川である 利根川の坂東太郎・筑後川の筑紫二郎に対し四国三郎と呼ばれる

この吉野川が 四国山脈を南北に横断するところが徳島県の大歩危～小歩危峡谷であり 池田からはほぼ中央構造線に沿って和泉層群

(上部白亜系)からなる阿讃山脈の南側を東流して紀伊水道に注ぐ



第1図 位 置 図



写真1
大歩危遊覧船乗船場付近の国道32号線脇の立看板

四国山脈の主体をなすのは三波川結晶片岩系であるが隆起をつづける四国山脈にたゆみなき浸食をつづけて刻みこんだ先行性横谷の吉野川の大步危峡谷にはこれとほぼ直交して東西に走る大步危背斜軸があつて三波川結晶片岩系の最下部の大步危層が小歩危峡谷にわたって連続露頭としてあらわれている

大步危遊覧船の乗船場付近には 大步危層の最上部と考えられている特異な岩相の大步危含礫（礫質）片岩が露出しており（本文第2図参照）昭和28年に徳島県の天然記念物に指定されている

この露頭付近で筆者らは大步危層の逆転を裏づける斜層理およびチャネル構造を発見したので 本文（26～28頁）に先だち まずこれらの事実を写真で紹介する

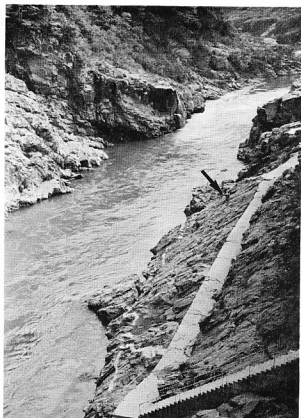


写真2 大步危遊覧船の乗船場 手前の階段が乗船場入口のあるレストランから降りてきたところで 乗船場へのコンクリート舗装の旧道は現在遊歩道となっている矢印の人物の立っているところに逆転した斜層理（写真4）及びチャネル構造（写真5）が認められその上流側に大步危礫質片岩（写真6）が分布する



写真3 層理面（傾斜約70度南）に平行な面に露出する礫質片岩（右は川側）
礫は扁平になっているが 伸張の方向性は認められない 断面で見ると 長軸と短軸の比は0.3程度のものが多い 礫の扁平伏態からみて 堆積構造も扁平化していることが考えられる 後述の写真4の斜層理の傾斜角は約10度であるが もともとは水中の息角に近い20度前後であったと思われる 20度の斜層理が10度に扁平したと考えると 礫はもともと0.6程度の短軸/長軸比をもっていたことになり これは普通みられる礫の形として妥当であろう



写真4 砂質片岩中の逆転した斜層理(本文第2図の第1地点)

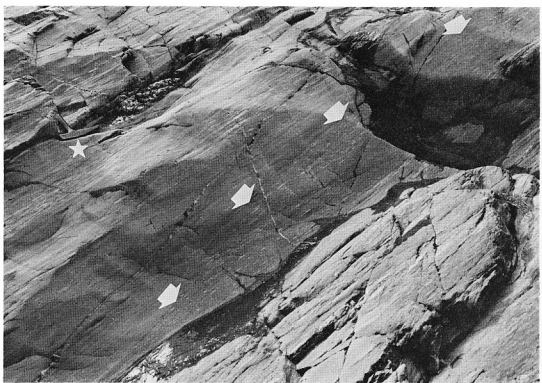


写真5 砂質片岩を浸食している礫質片岩の逆転したチャネル構造(矢印は同基底部 星印のハンマーの所は写真4の斜層理)

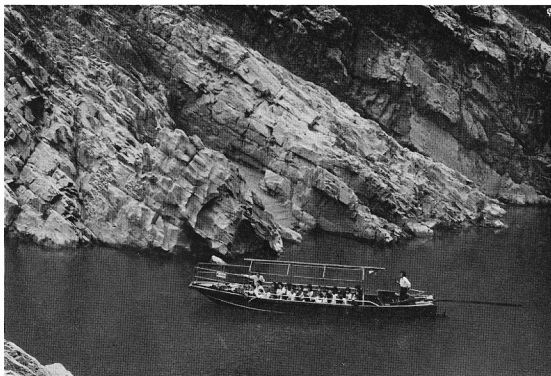


写真6 大歩危峡谷に連続露出する大歩危層の砂質片岩（乗船場より約700mの下流地点） 地層は右側（上流側）に傾斜し いわゆる大歩危背斜の南翼である

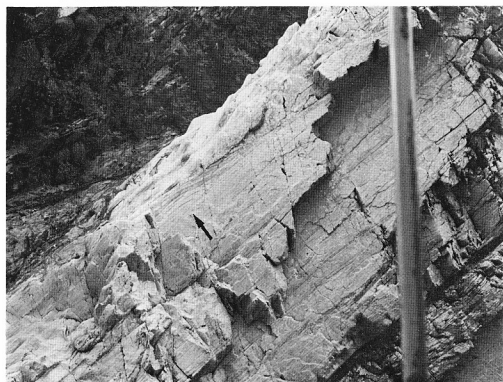


写真7 大歩危遊覧船の乗船場より約250m下流の左岸側（大歩危背斜南翼）で見られる砂質片岩中の逆転した斜層理（矢印のところ 鉄棒は遊覧船の天幕支柱）